

たぐいなき

■ 楽曲データ

歌詞：伊藤憲二 作詞

楽曲：平井康三郎 作曲

発表：大谷楽苑 1948年

初演：—

初出：『讃仰歌』 大谷楽苑 1948年

管理番号：M0292

■ 創作の経緯

大谷楽苑より「讃仰歌」第8番として発表。歌詞は公募による。

■ 校訂報告

校訂譜：『聖歌・讃歌集』第2巻収録

底資料：『讃仰歌』 大谷楽苑 1948年

比較資料：—

校訂の詳細：特記事項なし

■ 解説

仏教讃歌の歴史をひもとけば、近代日本の西洋音楽の発展に寄与した有数の作曲家が、いくつもの音楽性豊かな作品を残していることに気がつきます。もちろん、仏教讃歌は歌詞が最も重要なのですが、このような作曲家の仕事によって、み教えの言葉がいきいきと立ちあがり、音楽作品として素晴らしい表情を得てきたことは間違いないでしょう。

《たぐいなき》も、平易なつくりながら、歌曲として完成された美しい作品です。もともと混声四部合唱曲なので、主旋律を担うソプラノのパートが高音域で書かれており、仏教讃歌のなかでは、発声が少し難しい部類の曲かもしれません。場合によっては、移調（調子を変えて、全体に音を引き下げる）して歌っていただいてもよいと思います。

◆ 作曲者について

昭和から平成の時代に活躍した日本の代表的な作曲家、平井康三郎（1910～2002）の作品です。

平井は、東京音楽学校（現・東京芸術大学音楽学部）出身で、同校と大阪音楽大学の教授を務めました。仏教讃歌との関わりは古く、東京音楽学校在学中に交声曲《大いなる哉》（詞・林古溪）を作曲しています。またその後も、《衆

会》（詞・羽田野仁）や《咲き匂う》（詞・岡俊樹）など多くの作品をてがけました。

◆歌詞の内容について

作詞は伊藤憲二ですが、この人物に関しては詳細がわかっておりません。

歌詞は、仏の道をあゆむことの類ない喜びを、静かな感動をもって伝えています。一つひとつの単語は、特に凝ったものではありませんが、言葉の音としての響きをよく考えて作られています。とりわけ、春の穏やかな光と闇夜の対比や、薫る風の早緑色（若葉の緑色）と大空の青色、燃え立つ命の炎の赤色など、色彩豊かな言葉が選ばれており、眼前に歌詞の光景が浮かびあがるような歌になっています。

◆演奏のヒント

冒頭部分に「浄らかな感動にあふれて」とあるように、穏やかな曲調ながら、内に大いなる喜びを秘めた曲です。同じようなメロディー・パターンを繰り返し、最後に最高潮に達するという、歌いやすいつくりになっています。メロディーの持つ自然な流れに逆らわず歌ってください。

①この曲は、フレーズがすべてアウフタクト（前の小節の最後に、次のメロディーの出だしがくること）から始まりますので、最初の音のごつごつしないように、滑らかにそっと歌い出してください。

②メロディーの上行に合わせて、ふわっとクレッシェンド（次第に強く）してください。あまり直線的にならないように。

③7小節後半からのフレーズは、最初のメロディーを受け取るような気持ちで少し落ち着いて。

④3つめのフレーズ（9小節目4拍目～）は、高音のフォルテ（強く）に向かいますから、十分に息を吸って準備をします。

⑤10小節目最初の音「ミ♭」は、音程に気をつけて。ここで一時的に調子が変わります。ピアノ伴奏が盛りあがる手助けをしていますから、ピアノをよく聴いてみてください。

⑥この曲の最高音が、クレッシェンドの途中で出てきます。ただし、単に声を強めるのではなく、各節の歌詞に合わせた表現を心がけてください。

⑦クライマックスです。11小節4拍目からのフレーズの歌い出しは、ややテヌート（音の長さを保って強調する）してもよいかもしれません。晴ればれとした気持ちで歌いましょう。

⑧13小節2拍目は言葉の切れめを意識して、少し言い直すように。

解説執筆：石川紀久子（本願寺仏教音楽・儀礼研究所〔現・浄土真宗本願寺派総合研究所仏教音楽・儀礼研究室〕委託研究員）

※本解説は、「メロディーの宝石箱」No. 77（仏教婦人会総連盟機関誌『めぐみ』第204号収録）を加筆・修正のうえ、転載。

Copyright: Jodo Shinshu Hongwanji-ha Research Institute. All Rights Reserved.